

複式学級指導充実のために

—平成27年度複式教育推進指定校事業リーフレット—

📖 複式学級とは、どんな学級？

児童又は生徒の数が著しく少ない場合、数学年の児童又は生徒を1学級に編制することができます。このような学級を複式学級と言います。

法的根拠：公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律（以下「標準法」という）

1学級の児童又は生徒の数の基準は、標準法で示す数を標準として、都道府県の教育委員会が定めることとされ、島根県教育委員会では、独自に以下のようにしています。

📖 中学校……特別支援学級を除き、法律で示された基準の生徒数8人以下であってもすべて「単式学級」として編制する。（島根県独自）

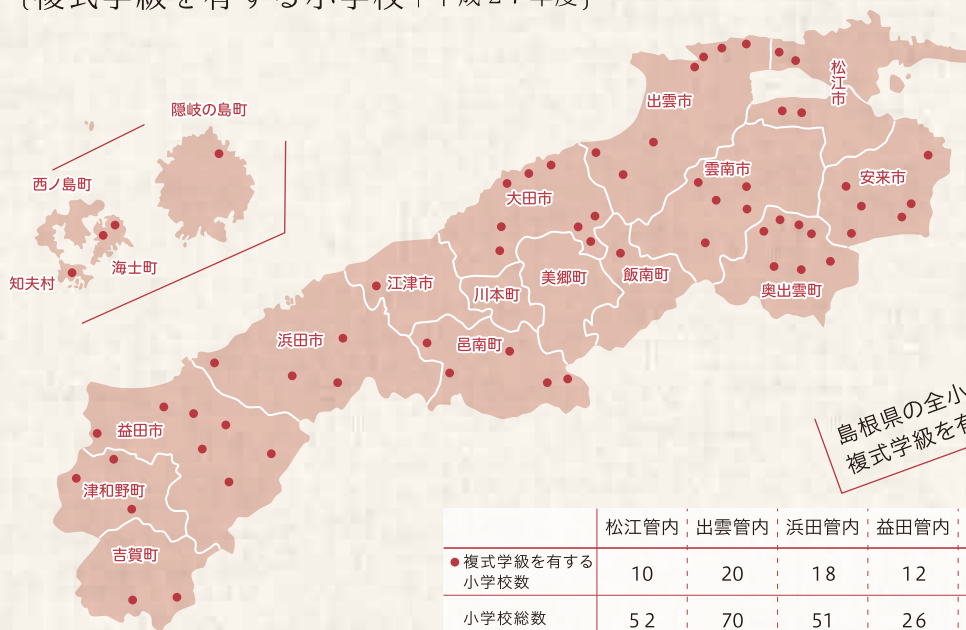
📖 小学校……複式学級の児童数は16人（第1学年を含む学級は8人）

すべて1・2年、3・4年、5・6年の組合わせで編制する。（島根県独自）

📖 島根県の複式学級を有する小学校の状況は、この10年で大きく変化しています

昭和50年代後半以降、島根県の複式学級を有する小学校数は、ほぼ90～100校の間で安定していました。しかし、ここ10年で複式学級を有する小学校数が30校近く減少しています。

{複式学級を有する小学校 | 平成27年度}



	松江管内	出雲管内	浜田管内	益田管内	隠岐管内	合計
●複式学級を有する小学校数	10	20	18	12	4	64
小学校総数	52	70	51	26	11	210
複式学級を有する小学校の割合	19%	29%	35%	46%	36%	30%

近年、児童数の減少により、単式学級から複式学級になったり、欠学年が生じ単式学級になったりすることが多く見られます。また、単複を繰り返す学校もあるため、異教科指導や同教科異単元指導、同教科同単元異内容指導（以下「学年別指導」という）による指導が必要となってきました。

複式学級の国語科指導

～児童の実態等をふまえた指導形態を～

島根県の国語科で主流のA・B年度方式

平成25年度の調査で、県内の中・高学年複式学級の約8割が国語科においてA・B年度方式をとっています。低学年では入門期ということもあり、約4割となっています。

A・B年度方式で国語科を指導することには、物語文や説明文の解釈に係る学習において間接ではなく直接に指導できるなど、児童にとってはより多くの人数で考えを深められるというよさが、教師にとっては教材・教具等の準備がしやすいというよさがあります。

実践に見るA・B年度方式「国語科」の課題

多くの小学校においてA・B年度方式が採用されている一方で、指導にあたっては先生方からは「下学年の児童が上学年の学習をするのが難しいことがある」「漢字の学習が学習内容と合わないことがある」といった声があがっています。

学習指導要領では目標と内容(漢字とローマ字を除く)が2学年まとめて示されている国語科ですが、教科書では下学年、上学年に分けて系統的段階的に目標及び内容が構成されています。多くの学校が採用している教科書準拠の業者テストも同様です。つまり、2学年分の教科書の内容を2分割するA・B年度方式には、下学年は背伸びし続け、上学年はステップを降りて学習することになるという課題が常に生じています。

国語科を学年別で指導するにあたって

算数科に次いで教科書の内容が系統的に示されている国語科の学年別指導には、児童が学年の段階に応じて系統的に学べるよさがあります。

A・B年度方式が主流の本県において、これまで実践されることの少なかった国語科の学年別指導のよさと課題について、推進指定校の取組をもとに考えてみましょう。

平成27年度 複式教育推進指定校

「奥出雲町立鳥上小学校」の取組

●全校児童数	43名
●複式学級	高学年
●公開授業	高学年 (5年4名、6年8名)
●教科	国語科

鳥上小実践のキーワード

わかり合いの場で使えるツールを増やして、ガイド学習を充実させる！

●全校児童数	52名
●複式学級	中学年
●公開授業	中学年 (3年8名、4年7名)
●教科	国語科

鳥井小実践のキーワード

目の前の子どもたちの実態に応じて直接指導と間接指導のバランスを考える！

●全校児童数	47名
●複式学級	中学年、高学年
●公開授業	中学年、高学年 (3年9名、4年6名) (5年8名、6年7名)
●教科	国語科

福井小実践のキーワード

学校全体で間接指導時の学習の充実を意識した授業スタイルを研究する！

平成27年度の取組

(1)年間指導計画の確認

- 同単元同内容と同単元異内容の折衷案
※第5学年は当該学年の内容、第6学年はA・B年度方式のB年度(第5学年と第6学年)の内容を学習

(2)先進校視察

- 山口県宇部市立小野小学校(12月)

(3)研究授業

- 5・6年複式国語科訪問指導(9月・1月)

(4)平成28年度の年間指導計画の作成

- 平成28年度に中学年、高学年が複式となり、平成29年度に高学年が単式学級になることを見越して検討。

(1)研修会の実施

- 内容 | 国語科における効果的な学年別指導のあり方
- 講師 | 奥出雲町立鳥上小学校
川上 宜久 教諭

(2)先進校視察

- 奥出雲町立鳥上小学校(4月・9月・2月)
- 和歌山大学附属小学校(6月)
- 高知大学附属小学校(6月)
- 全国へき地教育研究大会熊本大会(10月)

(3)研究授業

- 1・2年複式国語科研究授業(9月)

- 3・4年複式国語科訪問指導(10月・2月)

(1)先進校との情報交換

- 奥出雲町立鳥上小学校へ訪問し、情報交換

(2)先進校視察

- 広島大学附属東雲小学校(6月)
- 全国へき地教育研究大会熊本大会(10月)

(3)出前講座「複式教育」(9月)

(4)研究授業

- 1年単式国語科校内研究授業(12月)
- 2年単式国語科校内研究授業(1月)
- 3・4年複式国語科訪問指導(7月)
- 5・6年複式国語科訪問指導(10月)

授業公開

平成28年1月22日(金)

第5・6学年

- 教材 「熟語の構成を知ろう」(5年)
「言葉の由来に関心を持とう」(6年)
- 授業者 星野 寿幸 教諭
- 校外参加者 26名

{内容}

- 同単元異内容の授業公開
- 算数科で培ったガイド学習
- 同時間接指導における導入の工夫

平成28年2月2日(火)

第3・4学年

- 教材 「町について調べて紹介しよう」(3年)
「報告します、みんなの生活」(4年)
- 授業者 梅國 未来 教諭
- 校外参加者 30名

{内容}

- 異単元の授業を公開
- ガイド学習の実施
- Sカードの導入

平成28年2月16日(火)

第3・4学年

- 教材 「モチモチの木」(3年)
「プラタナスの木」(4年)
- 授業者 藤野 みほか 教諭

第5・6学年

- 教材 「わらぐつの中の神様」(5年)
「海の命」(6年)
- 授業者 稲葉 泰範 教諭
- 校外参加者 32名

{内容}

- 同単元異内容の授業公開
- ダイヤモンド型学習(導入と終末は同時直接指導、展開は同時間接指導)

実践から得られた学年別指導のポイント

集団思考のわかり合いの場で、「使えるツール」を増やしガイドを育てる！

「発表してください」「付け加えはありませんか」「別の考えはありませんか」など基本の型をベースに「使えるツール」(わかり合いの方法・手順)を増やしていきました。教材が違えば授業ごとにわかり合い方が変わってくるので、児童に学習をまかせるうえでとても大切なことだと考えました。

直接指導における教師の声のかけ方もよいモデルになります。間接指導の児童の学びを意識した直接指導を心がけましょう。

2学年同時にともに教師が直接指導。導入場面の指導を工夫する！

導入場面で、教師が2学年一緒に学習のめあてや手順を伝えました。一緒にめあてや手順を確認することで、互いの学年の学習に関心を持ち、互いに学習を高めようというムードが生まれます。また、児童だけで進めるためには、事前に打ち合わせが必要であったり、質問が出た場合には結局教師が答えることになったりします。教師が直接指導することで、その後の学習活動の時間を十分確保できました。

学年別指導の場合、様々な導入の仕方が考えられます。どのように導入すると効果的か、各校で学校全体で協議して検討しましょう。



見守りの姿勢を大切にしながらも、教えるべきことはしっかりと押さえる！

間接指導においてガイド役の児童に進行をまかせ、教師が見守りの姿勢をとることは、児童の主体性を伸ばす意味で有効です。1年間の実践を通して、目標を達成するためには、指導者は教えるべきことを押さえ、それ以外は見守っていく姿勢が大切であるとわかりました。また、間接指導の学びを充実させるために、児童に提示する「めあて」について、検討を重ねました。

大切なのは、その時間の目標を達成できる学びだったかどうかということです。児童の実態(ガイド学習の経験、学力、協調性等)に応じ、直接指導と間接指導のバランスを考えましょう。

間接指導時の助けに「Sカード」を黒板に！

「Sカード」は、自分たちだけで解決できない課題にぶつかった時に、黒板に貼り付け教師に知らせるためのカードです。もう一方の学年の学習を妨げず、静かに教師を呼ぶのに役立ちました。教師は隣の学年を指導しながらもSカードが貼られていないか確認しつつ指導しました。

名称は「ヘルプカード」「先生カード」等いろいろと考えられます。ガイド学習に慣れるにつれ、使用頻度も少なくなるでしょう。



低学年単式学級からの積み上げがガイド学習を支える！

低・中・高の3区分で「ガイド学習系統表」を作成し、複式学級である中学年、高学年はもちろんのこと、単式学級である低学年でも聞く姿勢や話す姿勢の基本を大事にしたり、児童同士の声のつながりを大切に授業づくりをしたりしました。

単式、複式が混在する学校においても、学校全体での研究・研修が複式学級指導の充実につながります。低学年の単式学級で学ぶときからガイド学習を意識して指導することが大切です。

経験を重ねることで、間接指導時にも児童が読みを深められる！

間接指導時、物語文の本文から登場人物の人柄が分かる部分を全員が順に発表し終わった際のことです。教師は隣の学年の直接指導にあたっており、一瞬学習が停滞するかに思いました。その時、一人の児童から「皆の意見で共通する部分に線を引いて考えてみようよ」と読み深めるための提案がありました。

児童が主体的、協働的に学ぶ姿を認めほめることで、より集団としての学びの充実が期待されます。



各指導類型の長所・短所をふまえて教育課程の編成をします

島根県では、県独自の加配により、第2・3学年、第4・5学年の組み合わせの複式学級が存在しないこともあり、複式学級を有する多くの小学校において、これまで約30年間、算数科以外はA・B年度方式(同教科同単元同内容同程度)による指導が多く行われてきました。それは、A・B年度方式に様々な良さがあるからに他なりません。

A・B年度方式と同様に、他の指導類型にもそれぞれの長所や短所があり、それらをふまえた指導を行う必要があります。

A・B年度方式と学年別指導の長所と短所は次の通りです。

A・B年度方式

○長所

- ・多くの人数で学べるので、多様な見方や考え方が出る。
- ・個に応じた指導をする時間を生み出しやすい。
- ・授業の準備等の教員の負担が少ない。

△短所

- ・系統的な内容の指導、特に技術的な面の指導が難しい。
- ・下学年の児童の能力差や経験差が埋められない場合が多い。
- ・転出入児童へ未学習の対応が必要。

学年別指導

○長所

- ・通常のカリキュラムで学習できるので、教科の系統性を踏まえた指導ができる。
- ・転出入児童へ未学習の対応の必要がなくなる。
- ・特に学年差の大きい1・2年生において指導がしやすい。

△短所

- ・直接指導と間接指導の組み合わせとなり、指導が複雑で難しい。
- ・2学年分の教材研究や学習の準備が必要となり、教師の負担が増える。

したがって、児童、学級や地域の実態を把握し、各指導類型の長所、短所をふまえたうえで、年間指導計画を作成し、児童の成長につながる教育課程を編成することが求められます。

教育課程の編成にあたっては、平成28年3月島根県教育委員会発行の「複式学級指導の手引き(平成27年度改訂版)」を参考にしてください。

複式教育推進指定校事業について

平成26年度から、これまで本県で取り上げられることの少なかった国語科、社会科、理科における効果的な学年別指導のあり方を研究し成果の普及を図ることを目的として、複式教育推進指定校事業を実施しています。

複式教育推進指定校の取組

📖 平成26年度は1校(奥出雲町立鳥上小学校)を指定

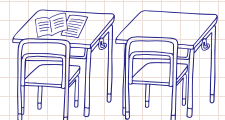
📖 平成27年度は複式学級を有する小学校3校(東部・西部・隠岐)を指定

※平成28年度も3校で実施予定

📖 内容

- 国語科、社会科、理科の学年別指導方法についての研究(学校が1教科を選択)
- 学年別指導の授業公開
- 先進地視察 等

📖 事業費 | 1校あたり30万円



複式学級から単式学級へ
「学び方」を発信！



「アクティブ・ラーニングの視点」からの 不断の授業改善を



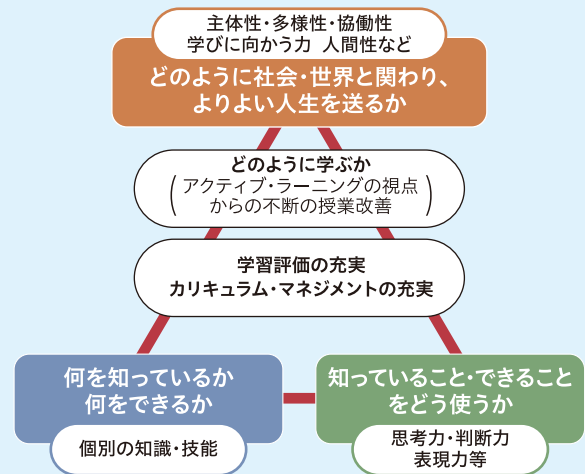
平成26年11月に示された文部科学大臣から中央教育審議会への諮問では、これからの教育の在り方について、学ぶことと社会のつながりを意識し、「何を教えるか」という知識の質・量の改善に加え、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であると述べられています。

「どのように学ぶか」ということについては、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習、いわゆる「アクティブ・ラーニングの視点」を取り入れ指導方法等を充実させていく必要があります。こうした学習や指導方法は、知識・技能を定着させるうえでも、また学習意欲を高めるうえでも効果的であることが、これまでの実践の成果から指摘されています。

複式学級指導では、児童が主体となり、友達との対話を通して自分の考えを広げたり深めたりできるような授業を展開することを主眼とします。そのためどのように学ぶ場を設定するかが授業づくり

のポイントになります。こうした複式学級指導の在り方を学ぶことは、「アクティブ・ラーニングの視点」からの授業改善を進めていくうえで、すべての教員にとって大切なことです。

—— 育成すべき資質・能力の三つの柱 ——



参照：教育課程企画特別部会 論点整理補足資料

🏠 複式学級指導の充実にご活用ください

平成26年度から、複式学級指導の充実に向けた県内の先生方への支援として、複式教育総合支援事業を実施しています。本リーフレットで紹介した複式教育推進指定校事業もそのうちの1つです。その他の取組及び島根県教育センターにおける研修等を紹介しますので各校の複式学級指導の充実にお役立てください。

(1) 複式学級指導の手引き(平成27年度改訂版)の発行

平成25年度に作成したものに、同単元同内容同程度(A・B年度方式)による年間指導計画作成の際の留意点や、学校経営、学級経営の留意点等が新たに加わった改訂版を平成28年3月に発行しました。(ポータルサイトに掲載)

(2) 複式教育研修

平成28年度は、松江会場(島根県教育センター・8月9日)、浜田会場(浜田教育センター・8月8日)で実施予定です。各会場50名(希望者・各校複数参加可)を対象としています。

(3) 出前講座の実施

島根県教育センターでは、複式教育をテーマにした「出前講座」を実施しています。平成27年度は学年別指導の模擬授業等を実施しました。

(4) 先進地の実践事例の島根県教育ポータルサイトへの掲載

他県の複式学級の国語科・社会科・理科の学年別指導の実践事例を掲載しています。各教科の特性や、学年別指導のポイント等に関する質問への回答等も記載されていますので参考にしてください。